



▲一橋慶喜(徳川慶喜)

今日の敵は明日の味方!?

江戸幕府政治に反抗した一橋慶喜。しかし、反逆の動きを抑えられ、幕府に仕えざるを得なくなった。その知り合いの武士から、幕府を倒すという目的を告げられる。それがなんと幕府の敵だった。一橋は驚きながらも、任せられた仕事を次々とこなしていった。

幕府に仕えざるを得なくなった一橋慶喜は、幕府の敵になる。やがてこの一橋慶喜は、幕府の敵になる。やがてこの一橋慶喜は、幕府の敵になる。やがてこの一橋慶喜は、幕府の敵になる。



▲侍の象徴である刀からステッキに持ちかえて、洋服を着て写真におさまる一橋。

海外体験で大変身!?

ヨーロッパ滞在中の様々な体験で日本の全面的な開国が義務だと痛感した一橋は、手始めにと侍から洋風の髪形と服装に変えた。一橋のこの切り替えの早さが日本の国づくりに生かされて、欧米の経済制度が次々と日本に導入された。



▲先生に習いに行くために遠い道のりを通った。歩きながら本を読み、声をかけられても気づかないほどだったという。



▲左が借付表。大関、関脇...と相撲の地位で評価して、競争意識を高めた。一橋は相撲の審判の行司の役職を兼ねた。

常に本を読む勉強家!

一橋は常に本を読む勉強家だった。他の藩士からも本を買い集めて加工して売っていた。一橋は父から本を教わり、やがていっしょの藩士から中国の学問を教わるようになった。幼い一橋は孔子の教えをまよとした。一橋は常に本を読む勉強家だった。

借付表を作った品管UP!

父親に倣って一橋は借付表を作った。一橋は13歳の若さで幕府の品管を始めて交渉できることになる。そのうえ幕府の品管を出す方法はないかと知恵をしぼり、よい借付表を作った。これにより、幕府全体の品管が向上した。

浪沢栄一 びっくり人物伝

近代日本経済の父

関わった会社は **500以上!**

株式会社 **ニッポン** の社長 **浪沢栄一**

日本経済の基礎を築いたと言われる浪沢栄一は、どんなことをした人なのかな? 見てみよう!

調査隊

(1840年~1931年)

現在の埼玉県深谷市で豊かな農家に生まれる。子どものころから学問に秀でて、商才を発揮した。成人後は幕府に仕え、ヨーロッパにわたった。明治維新後は新政府で様々な法整備に努め、民間では日本を発展させる多くの会社の設立・育成に関わった。

浪沢社長のニッポンの心得

- 一、信用第一とすべし**
幼いころから「論語」を学んできた一橋は、政府や実業界でもその教えを信じて仕事をした。しかし海外の視察先で「日本人は約束を守らず信用できない」という話を聞いて失望。以後他の人にもお互いに信用し合うことの大切さを説いた。
- 二、利益は共有すべし**
現在の株式会社のことを一橋は「合本組織」と呼んだ。会社にお金を出した出資者に、利益を分配する仕組みだ。一橋は会社が多くのお金をかせくことを第一とせず、公共のために役に立つ事業をやるべきだという考えがあった。
- 三、国際交流すべし**
日本が戦争をするようになると、海外諸国との関係が悪化する。一橋はすでに高橋だつたにもかかわらず積極的に海外に行き、外国人を日本に招いて、民間外交に努めた。そのおかげで、関東大震災後は海外から多くの支援が届いた。
- 四、弱きものを助けるべし**
一橋は社会福祉事業にも力を注いだ。お金がなくて病気がけがに苦しむ人、親のいない子ども、体の弱い老人など、それぞれの問題に向き合って施設を建て、人材を集めた。過去のフランスでの福祉施設の視察が役に立った。

浪沢栄一が手がけた、日本の基礎を築いた会社8選

- 不動産 田園都市**
新しい街づくり
1918年設立 (現: 東急)
- 電力 広島水力電気**
産業も暮らしも明るく!
1897年設立 (現: 中国電力)
- 鉄鋼 東京製綱**
日本を引っばる材料作り
1867年設立 (現: 東京製綱)
- 金融 第一国立銀行**
日本初の銀行
1873年設立 (現: みずほ銀行)
- ホテル 帝国ホテル**
ようこそ日本!のおもてなし
1890年開業 (現: 帝国ホテル)
- 製紙 抄紙会社**
情報化社会へ後押し!
1873年設立 (現: 王子ホールディングス)
- 製糸業 富岡製糸場**
メイド・イン・ジャパンを世界へ!
1872年設立
- 輸送 日本鉄道**
人と物を運ぶ
1881年設立 (現: JR東日本)

おとてに政府と日本銀行は、2024年に千円、5千円、1万円の各紙幣を新しくすることを発表。新1万円札に描かれる人物が浪沢栄一。以下、栄一だ。

一橋は江戸から明治、大正、昭和と日本の4つの時代を生きた。そして江戸幕府、明治政府、実業界と活躍の場を交えて、日本経済の発展のために長い間貢献してきた。

一橋は子どものころから常に学び、身のわりに収まらず、古い常識にとらわれなかった。その生き方が、のちに海外で経験した資本主義の仕組みを一橋に学ばせた。そして日本近代化に向けての制度を整え、あらゆる産業を育てるために、500以上の会社に関わったんだ。

そして一橋は、目先のお金や発展にこだわらず、人と環境にやさしい国づくりを目指していた。経済界を引退した後も、人と交わり、学びをこたえなかった。現在、SDGs(持続可能な開発目標)として、国や企業が、貧困・人権・教育・環境などの問題に向き合い、積極的に解決しようとしている。一橋は、浪沢栄一が思い描いたニッポンと現在の日本を、比べて考えてみるのもいいかもしれないね。

写真提供/浪沢史料館(マーク写真すべて)、浪沢栄一記念館(著作権)、イラスト/杉山真理 デザイン/タナカデザイン